

月刊

いじろのとも

第十二卷

九月号

人材第一社会

人材！ 人材！ 人材！

企業家も

百姓も

教育者も

政治家も

医師も

法律家も

なにもかも

人材！ 人材！ 人材！

シルバー人材銀行も

人材！ 人材！ 人材！

「みぎ」あつき日本

扶桑社の

教科書めぐる

混乱は

「ひだり」すずしく

「みぎ」あつく

なりし日本の

ひとつのあかし

人生を考え直して

みたい人は（九三）

『正法眼蔵』解説（三六）

仏性の巻を続けます。

たとひ覚知を学習すとも、覚知は動著にあらざるなり。たとひ動著を学習すとも、動著は恚麼（いんも）にあらざるなり。もし真箇の動著を会取することあらば、真箇の覚知了を会取すべきなり。仏之与性（ぶつしよしよう）、達彼達此（たつびたつし）（仏と性と、彼に達し此に達す）なり。仏性がならず悉有なり、悉有は仏性なるがゆゑに。悉有は百雑碎（はくざつすい）にあらざらず、悉有は一条鉄（いちじょうてつ）にあらざらず。拈拳頭（ねんけんとう）なるがゆゑに大小にあらざらず。すでに仏性といふ、諸聖（しよしよ）と斉肩（せいけん）なるべからず、仏性と斉肩すべからず。

ある一類おもはく、仏性は草木の種子（しじゅうじ）のごとし。法雨のうるほひしきりにうるほすとき、芽茎（がきよう）（正長（しやうちよう）し、枝

葉華果（しやうけか）もすことあり、果実さらに種子をはらめり。かくのごとく見解（けんげ）する、凡夫の情量なり。たとひかくのごとく見解すとも、種子および華果、ともに条条の赤心なりと参究すべし。果裏に種子をり、種子みえざれども、根茎（こんきよう）等を生ず。あつめざれどもそごばくの枝条大團（しじやうだい）となれる、内外（ないげ）の論にあらざらず、古今の時に不空なり。しかあれば、たとひ凡夫の見解に一任すとも、根茎枝葉、みな同生し同死し、同悉有なる仏性なるべし。

参考までに、現代語訳として増谷文雄著『現代語訳正法眼蔵第二巻』（角川書店刊）を引用させて頂きます。

たとい覚知をまなんでも、覚知とはそんな心の動きではない。たとい心の動きをまなんでも、心のはたらきはそんなものではない。もし本当の心のはたらきを会得できれば、本当の覚知もわかる筈である。

「仏と性とは、かれに達しこれに達す」という。仏性はかならず悉有である。悉有が仏性であるからである。悉有とはばらばらになつたものではなく、また鉄のかたまりのようなものでもない。あるいは、雲水が拳骨（げんこつ）を突き出すあれであつて、

大でもなく小でもない。また、すでに仏性というからには、もろもろの聖者とならべていうべきでもない。それは仏性と比すべきものではない。

ある一部の人々は、仏性は草木の種子のようなものだという。それは、法雨のきたって、しきりと潤すとき、芽を出し、茎を生じ、枝や葉をひるげ、花をひらき果をむすぶにいたり、さらにその果は種子をはらむ。だが、そのように考えるのは凡夫の測（はか）らいというものである。たといそのような見方をしても、その種子とその花と果は、それぞれ別々の心のすがたと考えてみるがよい。果のなかに種子があつたり、種子のなかに見えないけれど根や茎があつたり、あるいは、どこから集めてくるわけでもないが、そこばくの枝や葉をだして繁りはびこる。そんな内か外かの問題でもなく、生ずる生じないの問題でもない。これは古今にわたって空しからぬものである。だから、たとい一応は凡夫の見解にまかせるとしても、ここでは根も茎も枝も葉も、すべてが同時に生じ同時に滅するものと知らねばならない。おなじく悉有なる仏性だからである。

前月号の続きになります。

今月号もそれほど難しくないと思いますが、ただ、何

箇所かは分かりにくいところがあるようです。『現代語訳』で分かりにくいところや、間違いもしくは不十分であると思えるところを中心に、解説していきます。

まず、「真箇の覚知了を会取すべきなり。仏之与性（ぶつしよししょう）、達彼達此（たつびたつし）」「仏と性と、彼に達し此に達す」ですが、なかなか意味深長なことばに思えます。

特に、本当の覚知了を会取することが、なぜ、仏と性と、彼に達し此に達することになるのか、という問題ですが、なかなか難しいようです。現代語訳のように、直訳して「仏と性とはかれに達しこれに達す」では、何のことか分からないのではないのでしょうか。

私の解釈ですが、「仏とその性（＝本質・性質）とは、彼岸に達し、此岸に達する」ということではないかと思うのです。つまり、仏は彼岸の世界にあり、その性質は此岸の世界にある、ということではないかと思うのです。もつと言いますと、解脱すれば、仏の世界（＝彼岸）に達しますが、その人が現実の世界で生活することは、そこからこの現実の世界（＝此岸）に帰ってくることでと言え、ということではないかと思うのです。

次に進みます。

「仏性かならず悉有なり、悉有は仏性なるがゆゑに」と

いう文章ですが、この論理構造は「AはBである。なぜなら、BはAであるから」となっています。こういう文章が意味をもつ世界が禅宗なのでしょうか。禅問答さながらです。逆に言いますと、禅問答をしていると、こういう文章が平気で書けるようになる、ということなのでしょう。道元の文章には、お気付きのように、常にこういう言い方が出てきますので。

さて、次のところに、私にもよく理解できない部分があります。それは、悉有は「拈拳頭（ねんけんとう）なるがゆゑに大小にあらず」とあり、現代語訳は、悉有は、「雲水が拳骨（げんこつ）を突き出すあれであって、大でもなく小でもない」とあるところです。

これは、先に出てくる「百雜碎」が小であり、「一条鉄」が大であって、そうしたのも、悉有は「拈拳頭」であるが故に超えている、ということなのでしょう。禅宗で雲水が「拳骨を突き出す」ことに、どんな意味があるのか、よく知りませんので、これ以上解釈はできないのですが、悉有のすべてがそこに表現されているという点、つまり、「拳骨を突き出す」ことによって、悉有が仏性である、ということを知るといったことなのでしょうか。

次に、「種子および華果、ともに条条の赤心なりと参

究すべし」ですが、現代語訳では不十分のように思えます。「条条の赤心」ですが、これは「それぞれが、すじみちの乱れることがなく、何一つ余分なものない、あるがままの（心の）本質そのもの」と訳したらどうかと思います。そのように参禅して知るべきである、ということではないでしょうか。

次に、「内外（ないげ）の論にあらず、古今の時に不空なり」ですが、少し補足しておきたいと思います。これは、仏性が内にあつて、それが外に現れる、といったことではない。常に、仏性は空ではない、ということですから。

最後に「根茎枝葉、みな同生し同死し、同悉有なる仏性なるべし」ですが、「空ではない」ということは、つまり、常に、現代語訳にありますように「根も茎も枝も葉も、全てが同時に生じ同時に滅するものと知らねばならない。おなじく悉有なる仏性だからである」となるということですから。

でも、知るべきことは、物質や生命（動植物）は、そのままに仏性が悉有として同時に生じ、同時に滅するのですが、人間は、精神の二重性を持つが故に、煩惱に支配され、そのまま、仏性（現成）というわけにはいかないのです。そのためには、修行がいるのです。

自作詩短歌等選

国家意識喪失の原因

日本人の
国家意識の喪失は
アメリカ保護下での
平和と経済繁栄の
せいだという

民主主義の下で
信仰を失い
経済原則一本で
生きてきた
ツケだとは
気付かない

儲かりや何でもする

金儲け
できりゃ何でも
してしまう
遺伝子組み換え
なんのその
再生臓器
移植して
人の命も
もてあそば
人類滅亡
もう間近だぞ

国家の遺伝子管理

遺伝子の
情報すべて
記録して
国家が管理
する社会
果たして人の
幸せ来るか

大衆迎合主義

政治ポピュリズムが
（大衆迎合主義）
日本でも起こっている
と嘆く
民主主義とは
そんなものぞ

程度の悪い小児科医

母なれど
虐待するは
動物の
本性なりと
公言す
小児科医師が
居てて驚く

自由競争でいいの

勝つ者も
いつか必ず
負けていく
相対な世の
ならいと知れよ

食農乖離の進行

日本では
食と農の乖離が
だんだんと進んでいく
このままで
果たして
異変や事件・事故が
起こったとき
対応できるのか
経済原則や
民主主義原則だけで
この世を
治めようとすれば
ますます
混迷を深める

過去の贖罪

法がいる
信がいる
仁がいる
愛がいる
仏がいる
神がいる
日本だけ
ハンセン病患者
隔離せし
過去の贖罪
いかに果たすや

ベンチャーに取り組む

大量の
失業を生む
改革を
支えるものは
ベンチャーと
言うは易いが
ぐうたらな
人であふれる
日本の
誰が取り組む
政府正気か

精神を病む教員

先生の
精神疾患
増えつづけ
他職の人の
三倍になる
児童・生徒は
言うこと聞かず
管理ますます
強めていかれ
ストレス増える
ばかりなり
精神おかしく
成らぬが不思議ぞ

自作随筆選

思想を欠く日本人

先日、岡山の古本屋さんで買って来た、所秀雄という方の書かれた『地球村の食糧改革 - 貿易原理から生活原理へ -』という本を読んでいて、とても驚く記述に出会いました。

それは、日本人の弱みについて書かれた文脈の中で出てくるのですが、「The Atlantic」という外国雑誌に出てきた記事の紹介部分なのです。

そこには、「日本には原理（プリンシプル）がない」、「日本人は、抽象的原理に対する興味を欠いている」、「日本人にあるのは、お金の政治学（マネー・ポリティクス）である」、「日本人は、他の世界の人々との情緒的なつながりを欠いている」、「普遍的原理が日本では弱い」、「世界中のどんな人たちの生活も、同様に従っているような原理・原則に、日本人は従っていない」とありました。

断片的な紹介ですので、この記事の全体を読まないとその意図や目的は分からないのですが、これだけ読んで

も、私は、深い衝撃を感じました。

この記事は、日本が破竹の勢いで世界中を、金の力にまかせて荒らしまくっていた時代の1989年（平成元年）5月号に載ったものです。

その当時から、すでにこの記事は、私がこのところ言っています「日本人は民主主義以外の思想（信仰）を失って、根無し草に陥っている」ということを、的確に指摘していたわけで、そのことに強い衝撃を感じるのです。

まさにこの記事の指摘通りに、現在の「日本人にあるのは、お金の政治学（マネー・ポリティクス）」のみとなっております。

何度も述べて来ましたが、民主主義は、自己追求の制度です。自己追求のみに陥った時に人間が頼りにするのは、「自己」の根幹をなす「情動」の追求とその満足です。欲望（性欲・食欲・優越欲）を満たし、情緒（快苦・喜怒哀楽）や気分を高揚させることです。そのもつとも有用で汎用な手段が、「お金」ということなのです。

この記事の指摘は、まさに、このことを言っているのです。しかし、哀れで悲しむべきは、このことに日本人自身がまったく気付いていないことです。

昨年、東京大学で開かれた、こうした問題に最も敏感でなければならぬ日本倫理学会総会で、思想を欠いて、

ただ自己追求の制度である民主主義しか持たなくなつた日本人の精神的貧困とその惨状を訴えましたが、情けないことに耳を貸す人は一人もいませんでした。ある新興三流大学の非常勤講師しか職がない、ある若い人に鼻先で笑われたのが、その反応の最たるものでした。

先ほどの指摘の中にありました「日本人は、他の世界の人々との情緒的なつながりを欠いている」という指摘は、まさに、私が20年近く深い関心を抱き、研究してきた自閉症を思い出させる言葉です。50年以上前に自閉症という診断名を確定したアメリカのカナーという児童精神科医が、最初に書いた論文の表題が「情緒的交流の自閉的障害」というものです。言い換えますと、それは「他者との情緒的つながりが持てない」ということなのです。

ですから、この記述は、外国人から見ますと、日本人が自己に閉じていて、他者と情緒的な交流ができにくくなっている、ということを表しているのです。

人は、自己を肥大させるほど、自己に閉じて、他者とのこのころとこのころの交流ができにくくなってきます。それは、人間関係がただ取引行動のみになって来るということなのです。「ギブ・アンド・テイク」のみが行動基準になって来るのです。大学の先生の中にも、学生に

このことを公言してはばからない人がいるほどです。

なぜこうなってしまったのでしょうか。

このことも何度も書いて来ましたが、日本人が鎌倉時代から徐々に自己肥大に傾きだし、江戸時代に檀家制度が確定して、仏教が政治体制に組み込まれ、坊主が檀家の仕送りで食べられるようになって墮落してしまつたことに端を発しています。この墮落が、復古神道の興隆を招き、やがて明治維新になって廃仏毀釈へと至りました。その時、日本は決定的に教えとしての仏教を失つたのです。ということとは、公式には、千三百年に渡つて日本人の精神的支柱となつて来た仏教が、もはや日本人の生活の原理ではなくなつたということです。

それに代わつて、神道（と儒教）が国教とされ、軍国主義へと突進しました。そして、当然の帰結として、無条件降伏にいたつたのです。

そのときのアメリカの占領政策が、日本人を骨抜きにすることで、徹底していました。それは、旧来の日本文化を否定して、民主主義を植え付けただけではなく、公的に宗教を禁じてしまつた（政教分離・公的教育機関での宗教教育の禁止など）ということです。

その結果、日本人は思想と言えそうなものを全て失いました。そして、アメリカやヨーロッパに対して強い劣

等感を持つようになったのです。それは、いちいちあげませんが、有名な学者の様々な研究によく表れています。勿論、心理学者もその例外ではありません。

そして、その劣等感の補償として、経済的にアメリカに追いつき、追い越そうと、ひたすら突っ走ってきたのです。その結果、バブル経済までは、アメリカ人の神経を逆撫でするような、アメリカのシンボルと言えるようなものまで、どんどんと買いあさったのです。最初にあげました雑誌の記事は、その頃、書かれたものです。

それ以来、アメリカも恐れをなして、日本を何とか叩こうと策を練ってきたと思えます。その策の甲斐あってか、バブルの崩壊に至りました。その策は、先ほどの日本人の精神的弱点を巧みに利用した（今もしている）もの、と言えるように思います。

しかし、日本人はそのことに、これまでほとんど気付いて来なかったのではないのでしょうか。

思想を失い、活力も失って、あらゆる面でアメリカの支配を受ける日も遠くないように思えます。

日本がいま世界にできることは、信仰を失った者がどうなっていくか、身をもって体験している者の強みとして、いち早く世界に警告を発することではないでしょうか。世界中が日本の後から信仰を失ってきていますので。

釈尊のごとば（一〇三）

法句経解説

（三三八）たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執（渴愛）の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現れ出る。

意味深長なたとえのように思えます。でも、現代人には、この偈の意味はほとんど分からないのではないのでしょうか。

民主主義の現代では、自己の欲望を追求することが人生の目的になっています。昔なら苦しみを招くものとされたものが、現代では、積極的な追求の目的にされているのです。

ここで、「妄執（渴愛）」とは、欲望への執着、あるいは貪りのこところのことです。

私の心理学モデルで言いますと、「自己」の「情動」への執着のことです。情動には、欲望（食欲（物欲）、金銭欲などを含む）・性欲（子孫繁栄欲などを含む）・優越欲（権力欲、支配欲、出世欲などを含む）、「情緒」（快苦や喜怒哀楽）、「気分」の三つがあります。こう

したものの執らわれを「妄執(渴愛)」というのです。

こうした執着は、本来は、人を悩ますものなのですが、現代では、生活が豊かになり、不幸なことに逆に、こうした情動への執着をますます強めています。それがどれほど強いものであるかは、例を少し挙げれば、すぐお分かり頂けると思います。

例えば食欲ですと、飽食の時代と言われるように、食欲を追求し、食べ過ぎて健康を損ね、成人病を招いています。世界中からおいしいものを輸入し(自給率は穀類では20%、エネルギー水準で40%)、食べ散らかして、多くの残飯を棄てています。世界の中には、毎日多くの人が餓死している国がある、というのです。なんとエゴイステイックなことでしょうか。経済的に豊かになることによって、自己に閉じ、ますます自己の食欲への執着を強めています。

また、性欲ですと、フリーセックスの風潮をいいことに、世界中の人が性欲を追求し、そして不治の病であるエイズに陥っているのです。それが如何にエゴイステイックなものであるかは、自分が追求している人ほどが、自分の連れ合いや子が自分と同じことをすれば、とても動揺し、夫婦の縁や親子の縁(心理的なものだけに終わることもある)を切りたがることを見れば明らかです。

また、優越欲ですと、スポーツの隆盛があります。プロのする野球、ゴルフ、サッカー、各種格闘技などは、ますます隆盛を極めていきます。そして、人々は、そうした勝つ人への同一視によって優越欲を満足させるのです。ですから、多額の入場料を払っても、こうしたスポーツを観戦します。そのため、こうしたスポーツの有名プレーヤーの所得は、際立って多額です。そして、多額の所得を稼ぐためには、自己追求として「勝つ」ことだけが、全てなのです。それは、オリンピッククにしてしかりです。

また、情緒的満足の追求には、代表的には音楽があります。また中学生か高校生なのに、ヒットすれば、突如として高額の所得を得ることになります。そのメカニズムには、スポーツと同様の点があります。こうしたものを現代人はどれほど追求しているでしょうか。実は、こうしたものへの執着は、苦しみや悩みを生み出すのですが、経済的に豊かになり、それを自由に追求できるようになって、ますますそうした欲望の闇の中に迷い込んでいくのです。ここでいう「潜勢力」を「ほろぼす」どころか、ますます増強させているのです。情動はどんなに追求し、満たそうとも、そうしたその時から、すでに、渴きが始まっているのです。逆に満たせば満たすほど、

それへの執着が強まってくるのです。

潜勢力は、理屈（あたま）で、ほろぼすことはできません。ほろぼすためには、修行がいります。どうぞ、ヨীগなり、坐禅なり、読経なりを、お続けください。

（三三九）快いものに向かって流れる三十六の激流があれば、その波浪は、悪しき見解をいだく人を漂わし去る。その波浪とは貪欲にねざした想（おも）いである。

ここに出ています「三十六の激流」とは何なのでしょう。テキストにしています中村元訳『真理のことば 感興のことば』（岩波文庫）の訳注によりますと、次のように書いてあります。

「愛執によつてもし出された煩惱の流れが、内的なもの十八、外的なもの十八あり、あわせて三十六になるといふ」と。

私たち人間は、自分と環境との相互作用の中で生活しています。内的なものとは、前の偈（三三八）で出てきました「情動」です。それと外的な（物理的・人的）環境との相互作用の中で生活しているのです。

内的な情動は、外的なものがあって初めて満たされま
すし、また、外的な刺激（心理学では誘因と呼ぶ）があ

りますと、それによつて、新たに情動が引き起こされることになります。

そうした内的なものとの外的なものとのが、私たちを悩ます「煩惱」のもとになるわけです。しかし、煩惱のもとになつても、情動、とくに欲望を滅することは、できることではありません。また、外的な刺激も、自分が避けようとしても限界があります。そうしますと、煩惱から逃れることはできない、ということになってしまいます。でも、有り難いことに人間にだけ、煩惱を逃れる方法があるのです。それは、ここに出ています「悪しき見解」をいだかないこと、と、「貪欲にねざした想い」を持たないことなのです。

仏教では根源的煩惱として、むさぼり（貪）・いかり（瞋）・おろかしさ（癡）の三毒をあげますが、ここに出てきました「悪しき見解」と「貪欲にねざした想い」とは、癡と貪にあたっています。

でも、三毒を逃れるためには、「あたま」でそうしようと思つて出来るものではないのです。あたまの発達した人間の、そこが悲しいところなのです。釈尊の教えを信じ、修行する時だけ、欲望があつてもそれに執らわれず、外に欲望をそそる刺激があつても、執らわれない。そういう心境に至れるのです。

後記

一、残暑はまだまだ厳しいのですが、何か日差しや風に秋らしい気配を感じます。

二、カヤを刈っては、少しずつクロにしています。秋とはいってもとても暑く、一度にしますと、結構きつい作業ですので、暇があれば、少しずつしています。

三、秋ジャガを植えました。昨年、失敗したところはやはり、芽が出ませんでした。他のところは完全に発芽していますので、土地が悪いのだと思います。水はけは悪いのですが、それだけなのかどうか、よく分かりません。

四、昨年植えたイチジクに、次から次へと実が熟れるのですが、カラスなのか、キジなのか、ヤマバトなのか分かりませんが、熟れかけたと思うと、食べられてしまいます。困って、新聞紙で袋を作って包むようにしています。完全に包むと、実が傷んで、うまく熟しません。破りますと、見えて食べられます。大きめの袋で、見えないうちに先を破って、空気や光を入れるようにしています。

五、八月十日（金）、全国自由同和会徳島県阿麻名郡連女性部役員研修会（於郡連事務所）で、「日本社会の現状と人権問題」と題して、講演させて頂きました。五十名ばかりの方が、熱心に聞いてくださいました。ありが

とうございました。

六、八月二十六日（日）、久しぶりに岡山の古本屋・万歩書店に行きました。本店、倉敷店、平井店の三店舗をまわり、五冊三百円の本を中心に、百数十冊買いました。その中には、結構、欲しかった専門書もあり、安くてありがたい、と思います。

七、五月号で予告しました『学習障害研究の本』が、「これから出る本」九月下期号に載りました。値段は八千二百円です。私には二割引で入るはずですから、ご希望の方は、郵便振替でその額をお送りください。

月刊 こころのとも 第十二巻 七月号 （通巻 一三九号）	平成十三年七月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（しょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

